

白川静漢字教育賞【一般の部】実践報告書

1 目的・ねらい

学びにくさのある子も含め、全ての子どもが学びやすい漢字学習の指導過程は、「読み・意味理解」の確立の上に「書き」の指導を行う「読み優先」であること。また、その学習を子ども同士の一対一の関係を基軸において取り組むことで、子どもの主体が起き、仲間との協働の楽しさを実感し、集団の中で自立する個の育成につながるということ。それらを実証するのが本実践研究の目的・ねらいである。

2 実践の内容

(1)本実践研究の起点

今から6年前、臨床心理士井上知子氏から受けた提案が、本実践研究の始まりであった。

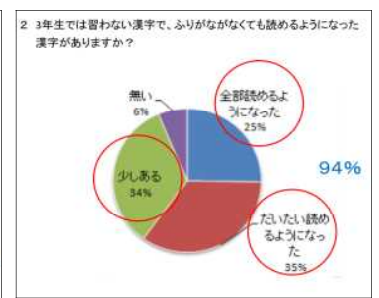
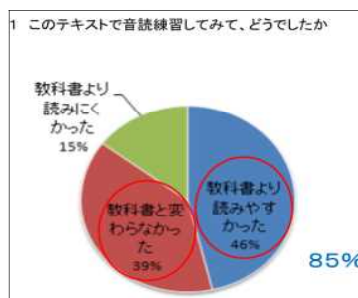
井上氏曰く「私の長男は、一年生で全くひらがなが理解できなかった。単なる音記号でしかないひらがなを文字として認識できないのは当然だと思い、意味のある漢字から教えればどうかと考えた。一日15分、一つの漢字について、成り立ちや、読み・意味、文作りを楽しみ、確実に読み・意味を理解できたらその文章を書く、という形で進めた。1年生の漢字を習得するのに2年かかったが、その後加速度的に速くなり、6年生卒業時には教育漢字全てを習得できた。長男はその後「知ること、考えること」の楽しさに目覚め、現在5カ国語を話し、国連事務局に勤務している。弟は兄のような課題は無かったが、同じようにやりたいというのでやったところ、2年半で習得してしまい、3年生からは猛烈に読書するようになった。この読み優先の漢字指導は学校教育でも必ず有効なはず。それを試してもらえないか。」

井上氏の漢字指導は全く理にかなっており、その合理性を実証したいと考え、有志とともに「子どもの主体を起す読み優先の漢字教育研究会」を結成し、実証研究をスタートさせた。

(2)漢字総表記の検証実践

井上氏曰く「子どもと一緒に作った文には常用漢字も含め、すべてルビ付きで見せて読ませた。」とのこと。確かに「はっ見」と「発見」では、読みの難易度は変わらず、むしろ漢字表記の方が単語のまとまりとして捉えやすい。

そのことを検証するため、平成27年2月、東書版3年国語の説明文教材「人をつつむ形」で、未習漢字も全てルビ付き漢字表記にしたテキストを作成し、市内3校の3年生に音読テキストとして活用してもらった。学習後に行った子どもたちへのアンケート結果は右グラフのとおりである。



その後、2年生の説明文「ビーバーの大工事」でも上学年の漢字ルビ付き表記を読む試行実践を行ったが、学習後のチェックテストでは、A小2年生のほぼ全員が6年生までの漢字全てを読めるようになっていた。

これらの検証実践から、子どもたちが学ぶ教材は、漢字で表記すべきところは全て漢字表記とし、未習漢字はルビさえ振れば、抵抗無く読めるということを確認するに至った。また、単語のまとまりが把握しやすくなることは、音韻処理の不全に苦しむ読み書き障害の子どもたちにとって有効な支援の手立てになるはずとも考えるようになった。

(3)音読教材「漢字音読名人」の実践

漢字指導の第一段階は、「漢字が読め、意味が理解できること」。そのうち、「読みの習熟」に特化した教材として「漢字音読名人」を作成した。

1 漢字につき音訓3例文、4漢字で1セット。音読練習し、読めるようになった漢字のルビは消していく。全て

④ 向 林が向う上す。	③ 面 山の向うは三重県。	② 起 漢字の起源は三千五百年前 起立してたしする。	① 葉 木が葉が落ちる。 また葉の木は針葉樹と云う。	① 「読んでみよう」 読めた
----------------	------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------

めざせ！漢字音読名人
《3年生①》

このテキストの目的は、漢字が読めるようになること。漢字が読めると、意味が理解できること。そのうち、「読みの習熟」に特化した教材として「漢字音読名人」を作成した。

①から④まで、漢字と読みを練習する。読めるようになった漢字のルビを消す。読めない漢字は、音訓（読み）を練習する。また、漢字の読みが読めると、漢字の意味が読めるようになる。また、漢字の読みが読めると、漢字の意味が読めるようになる。また、漢字の読みが読めると、漢字の意味が読めるようになる。

読む自信がついたら友達や先生に聞いてもらい、合格のサインをもらえたら次に進むというものである。

平成 28 年、市内の教員有志に取り組んでもらった結果、漢字音読名人に肯定的評価をした子どもは 92 % であり、当該学年以上の漢字が読めるようになったと答える子も 87 % であった。

試行した K 小の担任から「学習が定着せず、自信を無くしていた子が『これならできる』と言って、夏休みも継続して取り組み、登校日に『先生、聞いて』と成果を見せに来た。」というエピソードも聞いた。

こうした結果に自信を深め、翌平成 29 年度、東近江市の管理職会議で実践を紹介し、取組を呼びかけたところ、市内 7 校、31 学級 838 名の子どもたちが漢字音読名人に取り組んでくれた。

2 学期末に行った子どもたちへのアンケートでは、86 % の子どもたちが「楽しくやれた」と答えている。その主な理由は次の 2 つであった。

- ①「易しい・どんどん進める・達成感がある」
- ②「友達同士でやるのが楽しい」

①は予想どおりであったが、重要な発見となったのが②であった。

取組の初期、合否のチェックは教師がやっていたが、G 小学校で『「友達 3 人から合格をもらえたら OK』という形にしたら、取り組む態度が画然と主体的になった。』

という報告があり、それ以降、子ども同士の聞き合いで進められるようになった。子ども同士でチェックし合う形は、高学年になるほど好評で、「友達との関係が深まった」「あまり話さない人とも話せるようになった」という記述が高学年で多く見られた。

「学び」が成立する大前提は、学ぶ者の主体が起きることだが、その主体が起きるために、「友達同士の対一の関係」が重要な役割を果たすということが実践の中から見えてきた。その発見から、「子ども同士の関係で取り組む」ことが、以降の実践の中核理念となっていった。

漢字音読名人の取組によって力がついたと実感していることを問う設問の集約結果は右グラフのとおりであった。

特に注目したのが読書の設問である。半数の子が「読書が好きになった」と答えている。「漢字が読める→文が読める→本が読める」は、実践当初から想定していたことだが、それを裏付ける結果となっている。

ただ、初版は、漢字交じり文のシンプルなテキストであったため、漢字に対して強い拒否感がある子には、やはり難しいものと見えてしまうようだった。

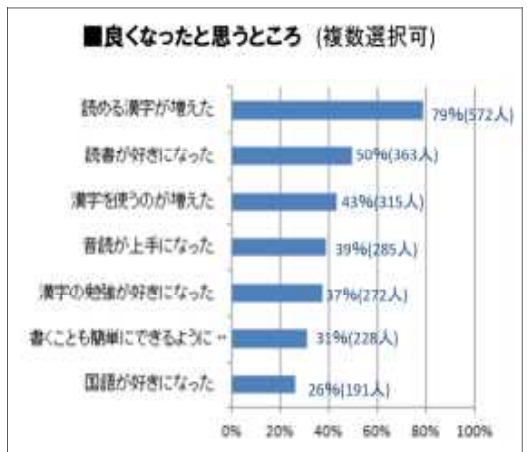
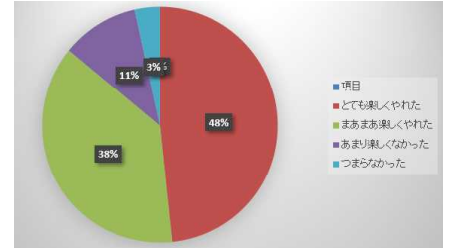
このことを踏まえ、テキストを改修した。別途作成していた「漢字音訓カルタ」を組み込み、低・中学年では例文がイメージしやすいようイラストも加えたものにした。

初期バージョンよりは取り組みやすいテキストとなり、実践校から、「難しく取り組もうとしない子がいる」という声は聞かなくなった。

漢字音読名人は、読み書き障害のある子への有効な支援の手立てになることを実証する事例も出てきている。

たどたどしかった音読がスムーズになり、それが自信となって、行動面まで明るくなったという報告を複数の学校から受けている。

こうした子どもたちの変容・成長の事実に触発され、「漢字音読名人」を指導に取り入れる学校が着実に増え、令和 3 年現在、学校全体や学級で取り組んでいるところが、滋賀県下で 20 校以上になっている。通常学級だけでなく、特別支援学級の子どもたちも喜んで取り組んでいる。そして、各校でのアンケート結果は、規模・地域環境を問わず、ほぼ、ここに挙げたものと同じ結果を示している。



「わたしは、本が好きです。」

□「(テン)」は読点と読点です。

□音読の練習をする。

□図書室で本を読む。

好きな本を、読んで楽しい読書の時間。

(4)教材「一日一漢字」の作成

「漢字が読めるようになる」ということについては「漢字音読名人」で一定の基礎が作れる手応えを得た。しかし、単に「漢字が読めた」というだけでは、不十分である。確かな漢字の習得のためには、井上氏が「その漢字で遊んだ」というように、漢字の意味理解や使い方、更には筆順も含めた、一字ずつの楽しい学びの場が不可欠である。

その目的のために、作成したのが「一日一漢字」である。教室での新出漢字の学習場面を想定して作

成したパワーポイントデータである。

①漢字の成り立ちを知る

福井県教育委員会発行の「白川博士の漢字の世界へ」を基礎資料として作成した。ストーリーのある解説は、子どもたちの知的好奇心をかき立て、また、「エピソード記憶」として強く印象づけることができる。

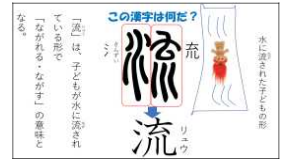
②音読み・訓読みについて、イラスト入りで読み方を示す

③その漢字を使った文例を示し、子どもと一緒に創作を楽しむ

「この漢字を使った文を考えよう」という活動は、確実に子どもの主体を起す。友達の創作文に触発されて、いろいろな楽しい文が作られていく。発表するのが苦手な子どもも気軽に発言できる。

④筆順動画

一画ずつの筆順が見える動画を入れた。エンドレスなので、子どもたちが目を閉じて書けるようになるまで繰り返し練習できるようにしている。



平成30年度、漢字学習に強い拒否感を持つ子どもたちが多いことに悩んでいたH小3年担任に「一日一漢字」紹介したところ、2学期から取り組んでくれた。そして3学期末の子どもたちのアンケート結果は次のとおりであり、88%の子どもたちが「楽しくやれた」と回答している。



一日一漢字をやってみてどうでしたか

	回答数	構成比
とても楽しくやれた	32	57.1%
まあまあ楽しくやれた	17	30.4%
あまり楽しくなかった	5	8.9%
つまらなかった	2	3.6%
無回答	0	0.0%
計	56	100.0%

良くなったと思うことは何ですか

	回答数	構成比
漢字の勉強が好きになった	29	51.8%
漢字の意味がよくわかるようになった	31	55.4%
漢字を書くテストが前よりよくできるようになった	37	66.1%

「とても楽しく漢字が書けたり、読めたりする」「いっぱい発表ができる」「書き順が動くからわかりやすい」といった感想がたくさんあり、学びにくさのある子どもたちにとって、「一日一漢字」もまた有効な教材になるという手応えをH小の実践で得た。

(5)教材「漢字書き名人」の作成

「一日一漢字」と連動させ、「書き」の練習を行う教材として「漢字書き名人」を作成した。子どもたちが無理なく、楽しく書き練習ができる形を求めて、試行実践を重ね、最終的に定まったのが下の形式である。

④ この新出漢字を使って創作文を書く

★亞朝、子ども同士でチェックし合い、サインしてから提出。

漢字の成り立ち・意味確認

① 読み確認

② 筆順確認

③ 一回全集中方式で「覚えられないまで練習」

「漢字書き名人」の特長

- 漢字音読み名人で読み込んでいる文だから練習しやすい。
- 「ひらがな文」を漢字交じり文に直して書く。文章の中で漢字を扱う事が普通になる。
- 回数ではなく「覚えられないまで」なので、子どもは集中して書く。
- 創作文づくりは、子どもが夢中になる楽しい活動。生活場面のエピソードとともに強く記憶されていく。
- 全体の特長として、文の中に既習漢字もたくさん出てくるので、既習漢字の復習が繰り返される。

「漢字書き名人」の取組を交流し合う中で、取り組んだ教師が異口同音に言ったのが、「子どもたちは『創作文づくり』に夢中になった。」ということである。

E 小1年担任は次のように報告している。「子どもたちは、いかに、習った漢字をたくさん使って文章を書くかを考え、知的好奇心を刺激されて様々な例文を書こうとする。一生懸命に頭をひねりながら自分だけの文章を作り出す子がほとんどであるのには驚いている。」

I 小5年担任も「宿題でやらせたが、誰一人やってこない子は無かった。友達の作る創作文を聞き合

うのが楽しくてたまらない、という様子だった」と報告している。

(6)「漢字音読名人」・「一日一漢字」・「漢字書き名人」をセットとした指導

「漢字の読み・意味理解」から「書き」までの指導教材が一通り整備でき、令和2年度には、これらの教材をトータルに活用した実践に取り組む学校も現れた。

その一つ、S小の5年の実践事例を紹介する。

【S小5年の取組】

①取組時間：S小タイム（スキルタイム）15分 ※漢字音読名人は自由時間に行う。

②取組内容：「一日一漢字」の学習を行い、その後、書き名人の単漢字数個練習と読みがなを書く。残りは自宅学習。翌朝、子ども同士で裏面のチェックをした上で提出。担任は練習欄をチェック。子どもの創作文を紹介する。10字学習をセットとして、小テストで確認（この教材では繰り返し復習の機会があるので再テストは行わない。）

■子どもたちの感想

- ・書き名人は、文章で書けるので覚えられるようになった。（ドリルは漢字と単語だけだった。）
- ・チャレンジ欄で文章を作るのが楽しかったし、文章がしっかり書けるようになった
- ・前に習った漢字もいっぱい書けるようになった。

■漢字学習の成果

- ・1学期末市販の漢字50問テスト 平均91点。2学期末には平均93点になった。
- ・読書量が飛躍的に増えた。1学期1週間に3～5冊読む子は4人だったのが、3学期には14人に増えた。本の面白さに目覚めた子も多い。

S小の実践に触発され、今年度、この3教材で指導を進めているI小6年担も「1学期末、市販の50問テストを行った結果、学級平均78点であり、「それほど書き練習をやらせた訳でもないのにこんなに高いレベルで習得できているというのは驚きだった。」と報告している。

3 実践の成果

足かけ6年に渡る実践研究から見えてきたことは、次の3つである。

(1)「漢字音読名人」は全ての子どもたちが学びやすいユニバーサルデザイン教育であること

漢字音読名人は、学力差を超えて、学級の誰とでも対等に取り組むことができる。また、それぞれの力に応じて取り組める。「自分には力が無い」とあきらめていた子が「これならやれる」と意欲的に取り組むようになった、読み書き障害のある子が教科書をすらすら読めるようになった、といった学びにくさのある子どもたちが学ぶ意欲を取り戻す事例が数多く出ている。

また、2年継続して全校で取り組んでいる学校からは、半数以上の子が一学年上の漢字まで読めるようになり、6年生は全員中学校の漢字に挑戦するまでになったという報告も得ている。まさに、学びにくさのある子も無い子も含め、全ての子どもたちが意欲的に取り組めるユニバーサルデザイン教育の典型だといえる。

(2)「一日一漢字」「漢字音読名人」「漢字書き名人」のトータルな学びが確かな漢字習得につながる

「漢字音読名人」は圧倒的な子どもたちの支持を得たが、「漢字音読名人」単体の取組では「書きの習得」は難しいという率直な現場の声があった。しかし、そこに漢字の意味理解・活用を学ぶ「一日一漢字」と書きの習熟を図る「漢字書き名人」を加えて取り組むことで、漢字習得率が飛躍的に高まるという実践報告が出てきている。「漢字の読み・意味理解の確立の上に書き指導を行えば、どの子も無理なく漢字が習得できる」という、理論的には全く正当なことが、実践の事実からも実証されつつある。

(3)読み優先の漢字学習は「教育」そのものであるということ

作成した一連の教材を使つての学習は、子どもたちの学ぶ意欲を引き出し、仲間と協働して学び合うことの楽しさを実感させる。読み優先の漢字学習に取り組んでいる学級では、例外なく、子どもたちの関係が開かれ、いじめなどとは無縁の温かな学級集団を形成するようになっている。この実践は、単なる効率的な漢字指導という枠で捉えるのではなく、全ての子どもたちの、ヒトとしての育ちを豊かに育む「教育」そのものなのだという思いを深めている。